釣れ釣れなるままに

２００２年思い出の釣行記 PART.　１

『季節感がない」は最大の讃辞

鹿島釣狂

釣遊会第１回大会

☆開 催 日	平成１４年４月２１日			
☆開催場所	須築港～中歌港			
☆入釣場所	島歌川右岸			
☆潮	干潮	０３：５０	－３㎝	
	満潮	１５：２７	１７㎝	
☆釣　　果	アブラコ	４５０	㎜	４／５
	カジカ	４１５	㎜	１／５
	ホッケ	３８０	㎜	３
	重量	５０８	０ｇ	
☆成　　績	合計点数	１３７３	点	
	成績	重量優勝		
	持ち点	１	点	
	累計点	１	点（①）	

転勤族の憂き目

３月末日、釣遊会仲間で地域の町内会長でもある高橋氏が町内会業務のために職場に見えられた。

「転勤になったんだってな。新開発表で見たぞ。大変だな。遠く芦別から、釣遊会の大会に参加できるのか。」

「もちろん参加させていただきます。少し遠くなりましたが万難を排して駆けつけます。これからもご指導よろしくお願いします。」

職業柄、上司の命による転勤は定めである。赴任地は「星の降る里芦別」の純農村地域にある職員９名の小さな職場である。女房と共に新任地に赴き、漸（ようや）く引っ越し荷物が片付いたころ、やはり釣遊会仲間の島氏から電話をいただく。

「第１回大会での釣り場情報を知らせてやろうとおまえの家に立ち寄ったが、住宅前に置いてあるはずの車がなく、代わりに見慣れない車が置いてあった。周辺の状況も変わっており、表札で確認するとおまえの名前がなかった。それで、おまえの自宅に電話してみると、娘さんが出て芦別に引っ越したと言うではないか。」

お世話になってきた釣遊会には今まで通りお付き合いさせていただき、第１回大会にも参加する心積もりであることを告げて電話を置いた。

阿部釣遊会会長からも祝福と激励の葉書を頂戴する。同じ職務を経験した大先輩として、大所高所からの指導を戴く。日常の業務から解放される釣り大会では、仕事のことには極力触れないように心掛けているが、転勤時の不安を抱えている私にとっては大変ありがたい言葉が続く。併せて大会参加の心得までもご示唆戴く。

女房も必死に自分の居場所づくりに精を出している。私の転勤と共に生活の変動を余儀なくされるが、早く地域に溶け込んで生活してほしいものだ。職場で地域の方々を案内しての行事が行われた。その後、参会者３０名程をわが家にお招きして簡単な懇親会を催す。酔いが回り出したころ一人の役員がカレンダーに目を留めた。新年に、カナダ屋釣具店からいただいた魚拓がメインのものである。まだ、引っ越したばかりの殺風景な壁には、その寂しさを紛らわすために、私が過去に釣り上げた大物の魚拓を貼り付けておいた。一頻（ひとしき）り釣りの話題で盛り上がったが、ゴルフには誘ってくれても、釣りに誘ってくれるような奇特な御仁は現れなかった。魚拓を一面に貼り付けておいたのは「私を釣りに連れてって」という秘めた思いを伝えたかったのだが・・・。

別荘（？）に籠もる

本年度より私の職場でもついに週休２日制になった。大会前日には同じ職種で組織されている空知管内の会議が岩見沢にて開催された。そのついでに岩見沢の自宅に一泊した。家主のいない部屋に入ると空虚な時間が流れる。いつでも戻って来られるようにと家財道具はそのままにしてあるのだが、閉め切った部屋にはかび具さが漂う。窓という窓を全て開け放つ。淀（よど）んで湿った空気に替わり、清々（すがすが）しい４月の春風が舞い込む。

釣り道具等も地下に眠ったままなので、釣り行脚のベースキャンプ地として活用することになるのだろう。岩見沢の別荘（コホン）に籠もって仕掛けやエサの準備をする。エサを下ろした後の生ゴミの処理に困窮する。大会終了後には、その獲物と共に愛車に積み込んで芦別に持ち帰らざるを得ない。

地下の暗闇で貴社発行の航空写真による釣り場ガイド誌『COAST　GUIDE』に併せて『北海道のつり』の「年間総合優勝者が明かすポイントガイド」シリーズでの最近の記事を読み漁る。

入釣候補地として北側から傾に下記の５カ所を設定してみる。

①藻岩岬　　第５候補
②新横滝トンネル南口平盤　　第２候補
③島歌川河口から吹込漁港左平盤　第４候補
④稲荷岬　　第３候補
⑤中歌くの字平盤　　第１候補

最終決定は当日の天候と仲間からの情報に委（ゆだ）ねることにする。

猫の目の心境

出発前、釣遊会仲間の嵐氏の職場に訪ね、情報を入手する。嵐氏は仕事中の手を休めて、下見での状況等も含めて快く応じてくれる。藻岩岬①は唯一、過去に入釣した経験のある所なのだが、崖崩れの不安があるので入り口が立ち入り禁止になっているようだ。嵐氏の

言葉で中歌のくの字乎盤⑤周辺に心が囲まった。

夕暮れが迫り、皆、今春の意気込みを漲（みなぎ）らせた挨拶を交わした後、バスに乗り込んだ。阿部新会長による恒例の挨拶が始まった。新役員の紹介と大会案内があったが、入釣場所については下見した者にお開き下さいとのことである。今回の大会範囲は岩見沢釣遊会ではほとんど開催したことのない海岸線である。

私が入会した１０年前の第１回大会は、この範囲で開催されたが、それ以来のことのように思われる。その時、私は藻岩岬に入釣したが、２５号のグラス竿と虫エサでアブラコとホッケを釣った。しかし、その時の成績は記憶にない。多分どん尻の方であったのだろう。

会長挨拶もそこそこに団体戦の抽選があり、宴会が始まった。中歌の『くの字平盤』⑤には山岸氏、谷口氏、広田氏が入るという。さらに、新横滝トンネル南口平盤②右先端 A（COAST GAIDE による）には安曽氏、吉田氏。左先端 B には島氏。吹込漁港③には堀内氏がこれまた入釣するという。どれもあまり大きな盤ではないので私は遠慮せざるを得まい。稲荷岬④ではホッケのウキ釣り師で釣りにならないという。

島歌川③は５月の釣り場だという。しかし、今年は暖冬で雪解けが早く、札幌の桜の開花宣言が２週間ほど早まったので可絶性はある。さらに、島歌川河口は嵐氏や前野氏が下見の折に大会用にと手をつけずに残しておいた場所である。今回は参加していない佐々木氏の談では島歌川の左がよいと言っていたとの情報が伝わってくる。島歌川から吹込漁港左平盤へと流すことに心が決まった。

ゴロタ石の上で

吹込漁港で堀内氏が降り立つ。吹込漁港右脇の平盤に向かったようだ。外防波堤の基部についた細長い平盤にはギョギョライトの青白い光りがいくつも見える。朝方に入る予定を立てているが、その頃には私が入る余地がないのではないだろうか。

不安を抱えたまま島歌川で降ろしてもらう。大きなゴロタ石が続く平磯は釣遊会に入って初めての経験となる。根がかり必至と考えられるが、どのような釣りになるのであろう。

河口のすぐ右に付いた舟揚場には札幌豊漁会の若い会員が入釣しており、釣果はまだ無しとのことである。私は彼から少し離れて釣り座を設ける。大きな玉石原のために三脚を設置するのに苦労する。ゴロゴロとした岩でその透き間に足を踏み外しそうで足元が覚束（おぼつか）無い。これでは歩く度にキャップライトを点灯しなければならない。私は一方所にじっとしているのが苦手なので電池の消耗も激しくなることが予想される。

島歌川に手を入れてみる。４月の川水は手を痺れさせるほどの冷たさに閉口させられるものだが、なんだか生温かく感じる。雪代水はとうに終わったのだろう。期待に胸を膨らます。

遠投に分あり

早速、カジカに狙いを定めてイカゴロネット仕掛けを暗い海に向けて３本共近投する。やはり根がかりばかりを繰り返し、しばらくアタリのないまま時が過ぎる。１本の竿を遠投にしてみる。これは根がかりがなく抜けて来る。１時半ごろ、遠投した竿に待望のアタリが出る。グングングンと竿先を締め込むアブラコ独特のアタリである。ゴロタの根に刺さり込まれないように一気にリールを巻き浮き上がらせる。デップリとした重量感のある４０㎝程のアブラコが上がった。２本を遠投に切り替える。

その遠投した竿に３０㎝程のローソクボッケが２本立て続けに来た。２魚種がそろったのでまずは一安心である。天を仰ぐと満天の星空であり、咥えタバコの煙がキャップライトの光を受け、静かに立ちのぼっていく。風もなく、波は穏やかに打ち寄せられており、寒さもほとんど感じない。この平穏感に転勤時の喧噪は何であったのかと思いを巡らせていると、青白く光ったギョギョライトが彼方の水平線に向かって突っ込んでいく。竿尻もガクンと持ち上がった。咥えたタバコが口から離れてゴロク石の隙間から海水に落ち、ジュッと消えていく。ガタガタと竿尻が叩かれているのを見るとカジカだろう。やはり、大振りに切ったカツオを唾えて３５㎝程のものが上がってきた。

近投した竿からはアタリは一度も出ない。これだけコマセやイカゴロを打っているにもかかわらず、いまだアタリが出ないのは魚がいないということだろう。３本共１本針と螺旋にした棒おもりで遠投し、広範囲に海底を探る。沖は岩盤に砂が乗り適度な根が在る。交互にアブラコとカジカが来て４０㎝程のアブラコ４本、３５㎝程のカジカが３本となった。痩せ細ったホッケ３本を含めると規定には余りある１０本が揃った。３８㎝程の痩せボッケが嫁さんになるのだろうか。少し物足りない。

ゴロタ石を駆ける

西の水平線の先がぼんやりと明るくなり、背後の低い山並みの稜線も鮮明になりだした。本日の最干潮時（３時５０分）を迎え、潮が止まった。しばらくは静かな状態が続くのだ

ろう。３本共、新鮮なカツオに取り替えて打ち直し、背後の大きな石にドッカと腰を下ろす。リュックからワンカップを取り出し喉奥にグビッと流し込んでやる。ついでに海からの豊かな贈り物に感謝の意を込めて、その滴を岩の透き間に注ぎこむ。こわばった背中を大石の滑らかな面に押し当てて伸ばしている時、竿先にアタリが出る。キャップライトを点灯し、おもむろに腰を上げ竿に近づこうとした瞬間、その竿先が大きくグックと突っ込んだ。大物だ。ゴロタ石の上を駆ける。

竿を煽ると、大物の感触が手に伝わってくる。剥き出しになったゴロク石の縁まで寄せた後は、一気にゴボウ抜きした。私の背後に抜き上げるつもりが、ぼろ竿のためにゴロタ石の間にある海水にボッチャンと大きな音を立てて落ちた。ドキンとしたが奴は石と石の透き間で針を銜えたまま私を威圧するように睨んでいた。本日の頭となった４５㎝のアブラコである。

すっかり明るくなった５時、遠投の竿にまたもや大きなアクリがでる。大アブラコを予想したが、上がってきたのは４２㎝程のカジカであった。嫁さんがホッケからカジカになった。これで、１３００点ぐらいにはなったであろう。

潮回りもよくなりさらに大物を求め遠投を繰り返すが、ハゴトコばかりが釣れ始め大きな魚はいなくなったようだ。舟揚場前の釣り人は島歌川の左側へと移動していった。吹込漁港方向を望むと平盤に乗っていた釣り人がいなくなっている。

吹込漁港まで空身で様子を伺いに行く。平盤はいかにも大物が潜んでいるように見えるが、根魚は先程までいた釣り人が大方釣り尽くしてしまったであろう。新しい職場へのお土産に回遊魚のホッケを釣るつもりで移動することにする。幸いコマセもイカゴロもたくさん残っている。

荷物を取りに向かおうとすると平盤に堀内氏が現れた。吹込漁港の右の平盤で釣りをしていたがあまり芳しくなく、こちらにやって来たとのことである。一緒に竿を下ろすことを約束して、島歌川に荷物を取りに戻る。

現実もまた無限

担いだ荷物の重さに閉口する。イカゴロ、コマセをほとんど使わずに残して、魚だけが増えた。日常からの運動不足がたたり、途中で休憩を取るはめに陥る。荒い呼吸を整えながら、背にかけた荷物をガードレールの上に預け汗を拭う。

ようやく左平盤に到着し、竿を準備している最中にも先に入った堀内氏がホッケ、カジカ、アブラコとテンポよく獲物を上げている。私にもすぐ前の溝で何とか３５㎝程のカジカが来た。コマセを撒くが期待したホッケの群れは来ない。

７時過ぎ、堀内氏が荷物を片付け始めた。彼は片付けるのに手間取るからと言うが１０時の上がりまでまだ３時間を残している。どれだけ丁寧に片付けるのだろう。私は１本の大物を求めて様々な場所に遠投を試みるが、竿を出していない堀内氏と同じように獲物が全くないまま時間だけが経過して行った。

海は私に夢を抱かせてくれる。然もその夢は無限であることを眼の当たりに示してくれるのである。竿先を見つめる目が水平線に吸い込まれ、遠く果てしない世界を空想し、己の心をそこで踊らせる。夢多き人は海辺に佇むことを好む。母なる海の果てしない広がりに、平穏感と自由と、その裏腹にある恐怖とが我々の魂を囚えるからである。ボードレエルが彼の詩集『悪の華』の中で「自由なる人は永久（とわ）に海を愛さん」と書いたフレーズがフッと頭に過る。

しかし、海は私に現実をもまた教えてくれる。おまえごときにそんなに簡単に夢を手渡すことなんかさせないぞというわけである。それを承知のうえで我々は海と付き合っていかなくてはならないだろう。現実を噛み締めながら、私も９時半に荷物を片付け始める。結果として堀内氏と共に竿を畳んでいたとしても同じことであった。

時間にも余裕があるため、魚の重さを天秤にかけてみる。頭はアブラコの４５㎝とカジカの４２㎝だが、後は似たようなものである。３５㎝程のカジカより４０㎝程のアブラコの方が重く、後の３匹はアブラコとなった。春のカジカは目方に欠ける。残った魚も４０㎝のアブラコ１本に３５㎝のカジカ４本である。これだけでも１２００点に届きそうである。いつもは規定の５本を揃えるのに四苦八苦している有り様なのに・・・。次回の大会に登録したいと考えるのは私ばかりではあるまい。ホッケ３本は全くのおまけであった。

最大の賛辞

いつものように苦虫を潰したような顔でバスに乗り込む。バスの中は、皆、よい釣りをしたように華やいでいる。私の苦虫をよそに堀内氏が釣狂がよい釣りをしたと告げている。

須築漁港で最後の会員を乗せた。審査は寿都漁港での予定だったのだがここですることになった。会心の５本を提出する。安曽氏が「鹿島は季節感がないのだから」と皮肉ともとれる言葉をかけてくれる。私はそれが彼の最大の賛辞と受け止めている。

審査結果

優　勝	鹿島釣狂	１３７３点（アブラコ４５０㎜+カジカ　４１５㎜+５０８０ｇ）	島歌川
準優勝	嵐　光博	１０９３点（アブラコ　　㎜+カジカ　　㎜+　　０ｇ）	中　歌
３　位	安曽和夫	１０８７点（アブラコ　　㎜+カジカ　　㎜+　　０ｇ）	上美谷
４　位	堀内正博	１０７３点（アブラコ　　㎜+カジカ　　㎜+　　０ｇ）	吹　込
５　位	前野達志	１０７２点（アブラコ　　㎜+カジカ　　㎜+　　０ｇ）	中　歌

９人が１０００点を越え、４月の大会としては皆健闘したと言えるだろう。私にとっての日本海初優勝である。さらに、第１回大会恒例の団体戦をも征することができた。帰りのバスの窓から来月の大会の入釣範囲を下見しているうちに、満足感と快い疲れのためにぐっすりと眠りこけてしまった。

自分で考えろ！

今までだと自宅で迎えてくれるはずの女房が今日は芦別である。自分で風呂の蛇口を捻（ひね）り、お湯を張っている間に後片付けをしてドッブリと浸かる。飲みたいビールはじっと我慢する。これから芦別に凱旋しなければならないのだ。遅い時間にようやく芦別にたどり着いた。アブラコの刺し身は夕食用ではなく寝酒用となった。

次の日、早速、職員に賞味してもらうことになる。彼らはアブラコやカジカの原物をほとんど見たことがないらしい。

「これがホッケなんですか。」（ヒラキはいつも見ているくせに）

「カレイは釣れなかったのですか。」（大会のためカレイは狙っていない）

「すごい匂いがしますね。」（活きがいいからだ）

「このグロテスクな魚は何というのですか」（醜い方が旨いのだ）

「こんなに大きな魚いつも釣れるのですか。」（いつも釣れると言いたいが）

「どこで釣ったのですか。」（川ではない。説明しても分からないだろう）

「どうやって釣ったのですか。」（それこそ説明しても分からないだろう）

「どうやって料理したらいいですか」（そんなこと自分で考えろ）

との質問には一々応えず、用意した買い物袋に魚と氷とを入れて持たせた。そして、次に日の「おいしかった」との一言で、次回の大会でも大物を進呈することを約束するのである。その大物を仕留めるべく今から新たな秘策を練っている。

終わり

【つれづれ】

〇職場の転勤　校長採用　芦別市立常磐小学校　純農村地域　歓迎会

娘が進学（北海道教育大学旭川校）　私の後輩　旭川に下宿

６年間の単身赴任の生活と別れ、女房と共に新任地に赴く。

風呂の排水がままならず北の京芦別へ～市教委に改修依頼

流し台の水漏れ～市教委に改修依頼

トイレの水洗化の要望：女房のポットン式への不満は不潔感からくるものではなく恐怖感からくるものであった。（子どものころの肥溜め式、便槽の中から白い手がお尻を触る）